雪中キャンプの方法（上）

山田　渉

雪中キャンプの楽しみ

ふと目をさますと身がしまるような寒気と無気味なまでの静けさ，一歩外へ出ると一面の白雪におおいつくされている自然の中に神々しいまでの美しさを見つける。

雪中キャンプの楽しみは，自然の中にとけこみ，ひたすら，そのおきてに従わなければならないという点で，よりスカウト的なキャンプだ。

非常にきびしい条件を持っているけれども，反面，それを克服したときのよろこびや，それをのりこえてスキー，その他の雪中プログラムにつながるものを展開するよろこびは大きい。またイグルーや雪洞は，それを作ること自体が楽しみであり，完成したときの満足感は特別なものがある。

長い冬の間，室内にとじ込められた生活を送っているスカウトたちにとって，戸外に解放され，力いっぱいに活動することのできることは何にもましてうれしいものである。

テントを使った雪中キャンプ

雪中キャンプをするときに，テントを使うか使わないかということは，設営に大変な違いがある。テントを使った場合には備品が多くなり，大がかりになる。しかし反面，一番簡単に設営できるし，また安全でもある。

本格的な冬山用のテントを使用することができる雪中キャンプであればよいのだが，多くのスカウト隊では冬山用のテントを持っていないと思うので，ここでは夏用のテントについてのみ書くことにする。

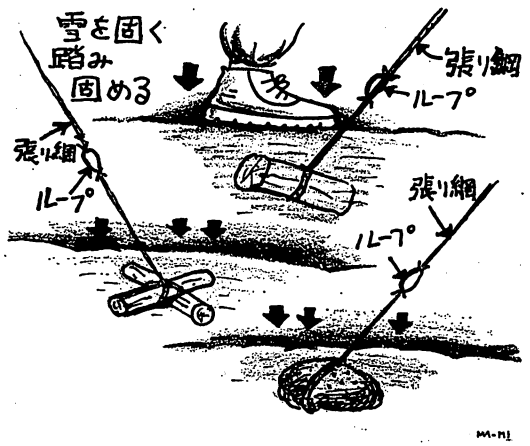
夏用のテントを使う場合には，それだけで，全く工夫のない場合には危険である。夏用のテントはどちらかと言えば，涼しく寝られるように考えられているのに対し，雪中キャンプではどうしたら寒さを防ぐことができるかを中心に考えなければならないからだ。

そのために一つの手だてとして，テントを二重に張ることをすすめたい。大型のテントの中にもう一つテントを張るのである。うまく張ることができるように工夫してもらいたい。1枚のままではしのげなくとも，二重にするとマイナス20度近くになってもどうにかすごすことができるようである。こうしておいて，雪のかべを作ったり，フライをかけたりして風よけを作る。

また，ふつうのペグではよくきかないので，木や竹などで特別なペグを作って打ち込んだり，ロープを結びつけてうめてしまったりするなどの工夫をしなければならない。

また朝起きたら，雪が数十センチもテントの上に積もっていたなどということもあるので，雪に押しつぶされないように太いじょうぶな支柱を使わなければならない。

テントを張る場所は，ガケ下，家などののき下，雪のつもった木の下など，上から雪が落ちてきてテントが押しつぶされそうな危険性のあるところは絶対にさけなければならない。

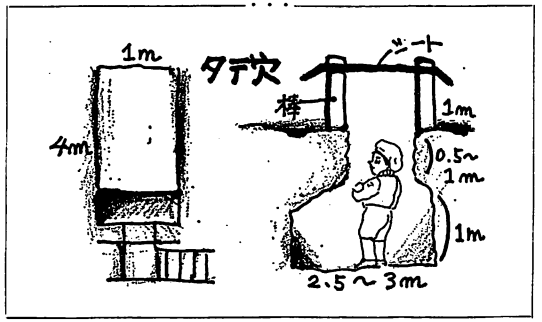


一面に白くなってまわりの物の区別がつかなくなってくるので，自動車などが入ってくることがないようにしなければならない。そこに人が寝ていることがすぐにわかるようにしておいたほうがよい。

タテ穴を掘ってするキャンプ

雪に穴を掘ってそこに寝るわけで，文字どおりの雪中キャンプになる。まず穴を掘ることができるだけの雪の深さのところをさがさなければならない。1メートル以上の深さがほしい。このときに，よく下に川が流れていたりすることがあるので注意したい。もしそれだけの積雪がなければ，まわりから集めて積み上げてもよいと思う。そして立ったままでもスッポリ入るほどの深さ（1.5メートルくらい）で，タテ・ヨコが1メートルに4メートルのタテ穴を掘る。

入り口はできるだけ小さく，いちばん大きい人のかたが，入り口の側面をこすりながら入れるほどのものがよい。カギ型にしてかい段をつけ，風



'80. 12. ㊋

が直接吹きこまないようにする。シートをつけて外気を防ぐ，これも二重にするとよい。

かべはできるだけきれいにならしておいたほうがよい。ならしておかないと室温が上がって雪がとけはじめたときに，穴のくずれを早めることがあるからである。

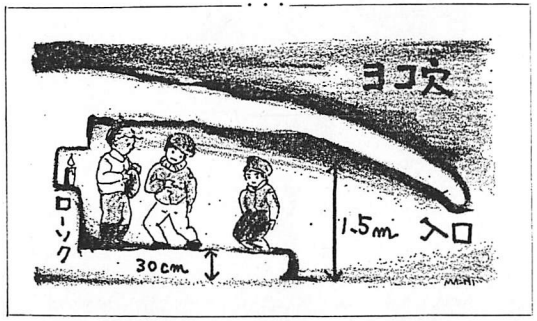
入り口のすぐそばは一段下げて水や炊工具などをおく所にすると，寝床部が一段上がったようになり，寒気がここへ流れていく分暖かい。

全部掘りあがったら天じょうを張る。天じょうには棒を数本わたし，この上にシートをかぶせる。シートのへりは雪できっちり押えつけるなどして風で吹きとばされないようにする。

すっかりでき上がったら，この付近に人が近づいてこの穴に落ちこんだり，また雪をくずしたりすることのないように標示などをする。

ヨコ穴を掘ってするキャンプ

ヨコ穴を掘るだけなので，特別の工夫はないが，安全で十分にもぐりこむことのできるだけの穴を掘ることができるように，雪がつもっているところを探すことが第1の問題である。ヨコ穴の掘れそうなところは山の斜面などが多いと思うが，わりとなだれの起こりそうなところが多い。



これについては十分過ぎるほど気をくばって実施してもらいたい。少しくらいならば雪を積み上げるなどして安全第1で掘ってもらいたい。

ヨコ穴式の場合も，入り口は小さく，天じょうはあつくしておくととても暖かいし安全である。しかし，入り口を小さくするとそれだけ掘り進む作業がむずかしくなるわけで，そのへんの工夫をしてもらいたい。

イグルーを作ってするキャンプ

雪を十分ふみかため，雪のブロックを作る。それを円型に積み重ねていく。はじめて作るときは小さいなあと思うようなものにしたほうがよい。なかなか形がととのわないし，天じょうをまとめるのもむずかしい。ブロックを重ねるにしたがって輪をちぢめ天じょうをつくる。

床を掘り下げると作業が楽だし，大きく作ることができる。しかし掘り下げははじめからするよりも，あるていど積み上げてからのほうがきれいにできる。またかべはきれいにならしておく。雪ブロックのつなぎには，雪に塩水をかけたものを作って使うとよい。雪ブロックはスカウトが持ちあげられるていどの大きさにすることが大切である。大きすぎては持てないし，小さすぎるとかべがうすくなり，また作業がはかどらない。

入り口は小さく，風向きを考えて作る。

積み上げるときに氷をいっしょにすると，中でストーブなどで暖をとり，温度が上がりはじめると，雪と氷ではとけ方がちがうので雨が降ったようになる。

寝床の作り方

雪の上にじかに寝たのでは雪に体温をうばわれてねむれない。しき物としてはエアーマットが良い。しかしエアーマットも雪の上におくとよくすべるので不安定である。すべり止めになるものをエアーマットの下にもう1枚しくとよい。

断熱材としては発ぽうスチロールは最も良いが，入り口が小さいので持ち込むのがたいへんである。また手軽に手に入るもので段ボールを重ねるのも良いが，これもすべりやすいのと，いくぶん断熱効果が悪い。もちろん板じきにするのは良いが，あまり大げさになると，キャンプなのか家を建てるのかわからなくなるので，そのへんのこともよく考えてしたい。

かべも雪，天じょうも雪の中に，生まれてはじめて寝てみると，かべがくずれるのではないか，天じょうが落ちてくるのではないかという不安が起きてくる。寝ている頭上はできるだけ広いほうがよい。

暖　ぼ　う

テントの場合にはそうとう温度を上げてもよいが，雪穴の場合にはストーブなどを持ちこんで，あまり温度を上げると，とけて雪のかべがくずれたり，天じょうが落ちたり，雨降りがはじまったりするなどのトラブルが起きるもとになる。あまり上げすぎないようにして，せいぜい上げてもプラス10度以下で止めるほうが無難である。それでも暖ぼうしたときには寝る前にしっかり雪の状態を点検しておいたほうがよい。

雪中キャンプで暖をとるにはまず十分に着こむことである。特に空気を着るように考えたい。

カイロや豆炭アンカなどの個人暖ぼうによってそれに補いをつけたい。ただ，これらの器具は長時間はだに直接つけているとやけどをするので注意したい。

部屋全体をあたためるストーブ類は，一酸化炭素中毒の危険もあるので，できるだけ少なくしたい。

照　明

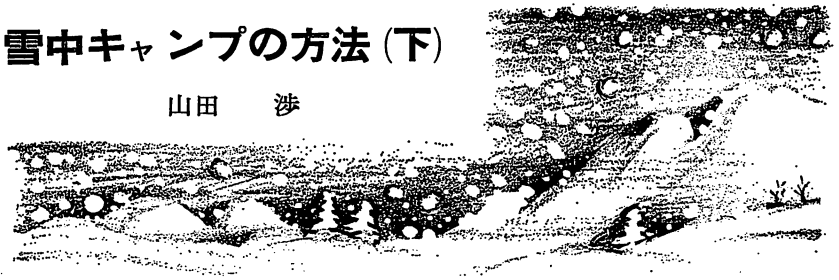
雪穴のかべにたなを掘り，ローソクを立て，そのあかりの下で語りあうなどということは，他のキャンプでは味わえないムードがある。また，ローソクは室温を一度くらい上げるはたらきもしてくれる。

懐中電灯はもちろん必要な照明器具だ。

（北海道連盟県副コミッショー
副リーダートレーナー）（つづく）

雪中キャンプの方法（下）

山田　渉



寝　具

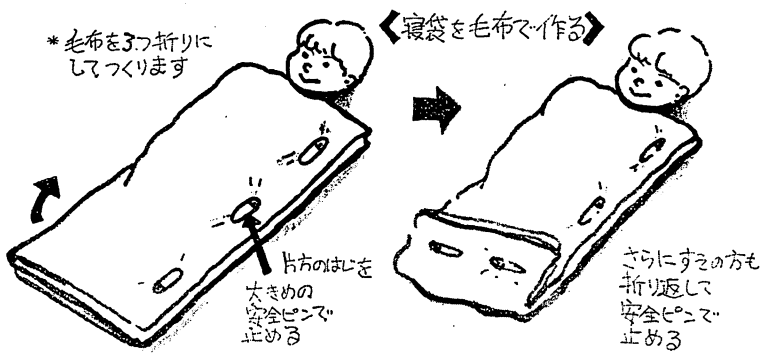
寒ければよく寝られない。スカウトたちは夏用のシュラフしかないのではないかと思う。夏用シュラフで雪中キャンプをするためにはいくつかの工夫をしなければならない。

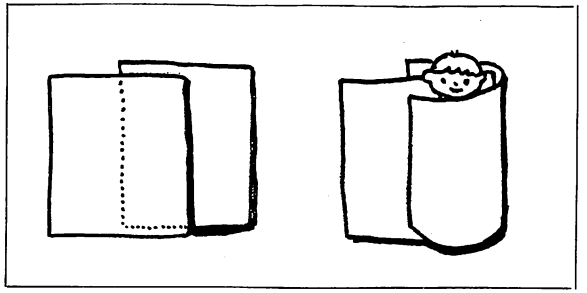
まず，シュラフの中にシュラフシーツを入れよう。

シーツは売っているものもあるが，家庭で使っているふつうのシーツをシュラフの中に入れられるようにぬい合わせるとよい。これに日連需品部でも売っているシュラフカバーを重ねると，ふつう冬用シュラフと言っているものていどのあたたかさを保つことができる。

しかし，北海道などではこのていどではまだ寒いので，この上に毛布を重ねて着なければならない。その場合もただ上からかけるのではなく，封筒のように折り重ね，足元もしっかりくるんで大型の安全ピンなどを使って止める。その中にもぐりこむようにするとあたたかい。

これでも寒さに自信のない人は豆炭アンカ，またはカイロを足先や肩口におくとよい。マイナス20度以下になると寝ている顔がつめたく感じることがあるが，帽子をかぶって寝たり，少し苦しいがシュラフの中にすっぽりもぐりこんでしまうと





よい。寝る前にぬいだ衣服はシュラフの間にはさんでおくと余分に重ねたことになるし，起きるときには温い衣服を着ることができる。靴も入れることがある。

服　装

下着は，活動が激しく汗をかきやすいので，よく汗のとれるものを着ること。

体が自由に動かせるようなもので，できるだけたくさん空気を着ることのできるものがよい。

ジャージーは風通しがよいので上に着るのはよくない。ジーンズはぬれるとかたくなって行動的でないし，かわきにくい。ヤッケやオーバーズボンなど化学センイで雪のつきにくいものがよい。

くつ下も毛糸のものか，２枚重ねにしたい。

手袋は雪の作業のときはゴム手袋がよい。しかしその下にもう１枚重ねないとつめたい。ミトンのようなもので化学センイの雪のつかないものや毛糸の手袋もよい。軍手は，雪をつかむとすぐにぬれてしまうので２枚重ねをするなどをして使うこと。

帽子は耳をおおうことのできるものをかぶる。また，首にスカーフをつけておくとずい分あたたかいし，ほおかぶりにもなる。ふろしきでも代用できるし，手ぬぐいでもよい。

はき物

一般的にはゴム長ぐつをよく使うと思うが，ゴム長ぐつは長時間雪の上に立っているとつめたくなるのでくつ下をあつくしておくとよい。雪が入らないようにヒモでしばるとかカバーをかけるとかすると作業しやすい。

立っているだけならスキー靴はあたたかいが，作業には不向きである。

スノートレーニングシューズなどもある。

献　立

ハイカロリーで，簡単に調理できるものがよい。暖かくて，腹もちのよいものをあまり品数を多くしないで用意したい。あとしまつのことも考えておくこと。

水物はひかえ目にする。たびたび小便に立つと本人の体はひえるし，また出入りで仲間にもめいわくをかけることになる。

燃料はラジュースや固型燃料などをうまく使いこなすようにしたい。

水は室内に入れておかなければ氷ってしまう。

炊具などもできるだけ少なくする。

81. 1. ㋐

工　具　類

寒い中で作業をするのでよく手入れした工具を用意したい。特にスコップは大型のしっかりしたものを使わなければ作業がはかどらない。

雪の中にもぐってしまって，よく工具等を見失ってしまうので，作業の区切りがついたときに点検をするように心がけること。

また用具をなくさないためにも，日没1時間前には作業が終わるように時間設定をしたいものである。これは作業能りつのうえからも，また宿泊準備の心がまえからもそうしたいものである。

準備のすすめ方

雪穴に寝るようになるためには，事前の準備訓練をしっかりやってから実施してもらいたい。雪の中にテントを張る。雪穴を掘るということは，それまでに体験があればそれほど大変なことではないが，はじめての人には予想以上に時間のかかるものである。

雪穴を掘ることなどは，それ自体が楽しいプログラムなので，事前に十分訓練プログラムを組んでかかってもらいたい。

はじめてキャンプをするときには，寒くてねむれないスカウトや，不安でねむれないスカウトのために，夜中でもすぐに行くことのできる温かい小屋，あつい湯の入ったポットなどのあるところを用意してもらう。また，必ずリーダーもいっしょに泊ってもらうことが必要である。

安　全

まず第1に寒さについて十分けいかいしなければならない。冬のキャンプでは死につながることがある。未熟な計画，不十分な計画で実施してはならない。死亡事故にまでいたらなくとも，とうしょうにかかったり，カゼをひいたり，その他の病気にかかることも考えられる。

また準備訓練が十分でないために，作業に無理があってつかれ切ってしまったということもある。しっかりした計画のもとに準備をしてもらいたい。

次に器具などの取り扱いについても，寒さや着ぶくれのために，どうしても動作がにぶくなる。また，せまい場所で生活しなければならなくなることもある。夏のキャンプなどとは考え方を変えて，できるだけ安全に，手軽に道具を使うように工夫したい。

特に一酸化炭素中毒，なだれなどという大きな危険と隣り合わせですることなので，くれぐれも原則に忠実に行動してもらいたい。

冬という自然のおきてにしたがうことを忘れてはならない。

撤　営

雪が降ると汚れはかくしてくれるし，火の心配もあまりないからと，撤営をいいかげんにすると事故の元になる。

まず穴は人が落ちたりすることのないようにうめもどす。残菜なども雪中にうめると，春になると異様な形で残っている。夏のキャンプのあと地よりも見苦しいものである。

撤営計画を考えた準備や設営をして手早く，きれいにひきあげられるようにしたい。

おしまいに

雪中キャンプの基礎的なことをのべてきたが，一般的に「雪」というとどれも同じように考えてしまうが，雪の質はその地方によって大きく異なるということを知っていてもらいたい。

あとしまつも きちんとしよう！

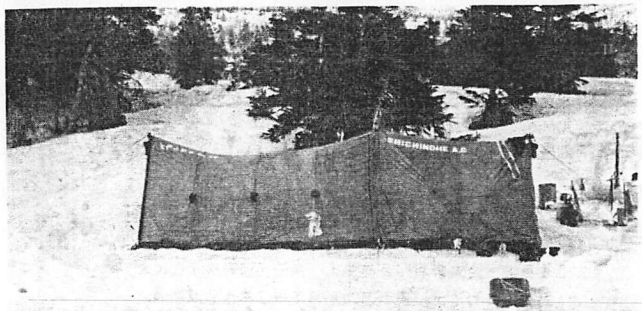
具体例をいうと，たいていの人は雪の中での遊びの一つに雪合戦を考えると思う。しかし，北海道の北部では雪をにぎっても玉にならない日が多い。それは寒気がきびしくて雪が全部氷ってしまい，ねばらなくなるのである。（玉になる日もあるが）

軽い雪，重い雪，しめった雪，かわいた雪，その地方によってちがう。したがって先にのべたイグルー作りに雪ブロックを切るにも，雪穴を掘るにも，その地方地方によって条件がちがうのである。それを考えないで雪中キャンプの企画をしてはならない。

もちろんスカウトたちは雪の中で育ったのであるから，雪についてはよく知っているだろう。しかし，やはり土地の経験者によく聞くことである。危険な個所などについては必ず地元の人の意見を聞き，十分な調査をして企画実施したい。

ともあれ雪中キャンプの実施によって雪国のスカウトのプログラムが大きくふくらむことはうたがいない。冬の子，雪の子のスカウティングが広がることを期待している。　（おわり）

（北海道連盟県副コミッショナー
副リーダートレーナー）



雪中野営2題

八幡岳で〝克雪〟訓練

山口　俊夫

雪国の青森に住みながら，当地のボーイ隊の野営訓練は，ほとんど無雪期に実施されていた。そこで，われわれは雪から逃避しないで，むしろ雪に対して積極的に取り組ませ，順応させ，雪を利用してスカウトたちに野営生活をさせてみようと春山野営訓練を始めた。

第1回は団発足の昭和43年で，以来毎年春休みを利用し，隊員全員が参加して行われ，今回で11回を数える。今回の訓練は，54年3月27日から30日まで3泊4日の日程で中部上北八幡岳放牧場を野営地として実施した。この雪中野営訓練は，社会人や大学山岳部でやるような雪山訓練でなく，あくまでボーイ課程の〝克雪野営訓練〟というところに意味を持っている。

§ 装備について

1．**個人装備**　寝袋（冬用か3季用），毛布，替え下着，作業衣，防寒衣（セーター，ヤッケ，オーバーズボン，防寒手袋，防寒帽など），汗ふきタオル，軍手，ナイフ，懐中電灯（予備電池），水筒，筆記具，ビニール袋，風呂敷，予備長靴（防寒用），マッチ，スカウト訓練用具メモ帳，野営計画帳，予備靴下，作業帽，ハンガー，スキー用具一式，持薬，昼食，米1.5升参加費2,000円，その他。

2．**野営用具**　ウインパー（内張を含む）3張，角材（1寸角×45㌢，ペグに使用）80本，ビニールシート，プラフィルト，エアーキャップシート（床断熱用）必要数，フライテント（指導者テント用）2張。

3．**炊事用具**　飯用の圧力釜（2個）のほかは，夏季用を使用。

4．**燃料および器具**　プロパンガス(10㌔)1本，2巻コンロ2台，ガソリン60l，石油20l，ラジュース4台，発電機1基，トーチランプ1台木炭2俵，空きカン2個，ガスランタン3台，メタ1箱，オイルポンプ1本，その他。

5．**工具・その他**　スコップ（剣先，角）6丁，ノコギリ3丁，ナタ3丁，針金，モンキー，ペンチ各1丁，会議用テーブル7卓，イス20脚，寒暖計，巻尺，国旗，隊班旗，地図（25,000分の1）20部，シルバーコンパス20個，救急薬一式，35㍉，8㍉カメラ，同フィルム，テレビ，ラジオ，ザイル2本，補助ザイル，スノーモービル，スノーボート，ベニヤ板。

§ デポと輸送について

1．**事前準備とデポ**　根雪にならないうちに野営用具，炊事用具，燃料，器具，工具等の装備，資材を点検，こん包し，昭和53年11月26日にトラックで現地に荷上げし，放牧場の小屋にデポする。これは，本隊出発の際，行動が容易になるように，荷物量を軽くするためである。

2．**実施当日の輸送**　人員輸送は乗用車3台，資材輸送はトラック（2t車）1台。

実施当日の装備は，個人装備，食糧，共同装備（スコップ3丁，救急薬品，国旗，隊・班旗，地図，磁石，教材，カメラ類，スノーボート，スノーモービル等）だけである。

3．**雪上輸送**（運搬距離4㌔余り）　個人装備は各人が背負って行動。共同装備と残りの個人装備は，スノーボートにつけ，スノーモービルでけん引して運搬。（往復4回）

§ 参加人員について

隊長1名（日本山岳協会公認指導員），副長2名（大学生），ＳＳ2名（高2・1名，高1・1名）ＢＳ12名（中2・3名，中1・3名，小5・2名，小4・4名）

§ プログラム日程を追って

＜3月27日，晴＞　午前8時，中央公民館集合，装備，食糧等を点検後，乗用車，トラックに分乗して出発。道は次第に雪の回廊となり，町から30㌔程で行き止まりとなった。ここから八幡岳踏破の雪中行軍である。スカウトは個人装備を背負って出発。副長は残りの装備をスノーモービルで運搬。軟雪のため，スカウトの靴は20～30㌢ぐらい雪にもぐり歩行困難。

4㌔余の雪の中を約3時間ほどかかって，午後1時に野営地に到着。積雪1㍍50㌢。休憩後，前年デポした小屋は，雪で半分ほど埋まっているため，入口を除雪して，中の装備を取り出し，設営した。

午後5時。設営完了。全員集会テントのこたつに入り，恒例の入山式（ディナーパーティ）を開催，雪中野営の成功を祈って乾杯。

＜3月28日，晴後曇＞　午前7時30分，メーンプロの「八幡岳登山」に出発。前夜気温が下がったため，雪も固く締まり，歩きやすい。約3時間の登りを全員元気で登頂。

頂上は春とはいえ，2㍍余りの積雪で，八甲田山からの風は強く，厳冬期そのもの。素手でピッケルを握ると皮膚がくっつく。神社の御堂の採光用の窓から中に入り休憩。熱いコーヒーで体を温めるが，寒気がひしひしと体に迫る。灯明のローソクに火をつけて手を温めるスカウトもいる。

ここでスキー下山のときの注意事項を次のようにみんなに伝えた。

(1)樹木のすぐ側を通らないこと。(2)樹木は勝手に動かないから，絶対にぶっつからないこと(3)全員一列縦隊で滑ること。

いよいよ，八幡岳大滑走である。雄大な樹林地帯を一気に滑

80. 1. 5c

献　立　表

	朝　食	昼　食	夜　食	ティータイム
3/27		おにぎり（各自持参）	ご飯，タラ汁 マダラ，食塩，トーフ，大根，長ネギ，タクアン	コーヒー，みかん，おつまみ かんジュース
3/28	ご飯，みそ汁 トーフ，みそ，長ネギ，にぼし，ジャガイモ，納豆，しょうゆ，大根おろし，タクアン	おにぎり 梅干し，のり，ウインナー，魚のかん詰，みかん キャラメル， かんジュース	ご飯，ジンギスカン マトン，タレ，キャベツ酒，玉ネギ，ピーマン，白菜漬	コーヒー，おつまみ，お菓子 かんジュース
3/29	ご飯，みそ汁 トーフ，みそ，長ネギ，にぼし，ジャガイモ，生卵，しょうゆ，味付のり，タクアン	ご飯，野菜いため 豚肉，キャベツ，にんじん，食塩，玉ネギ，ピーマン，こしょう，しいたけ，しょうゆ，タクアン	ご飯，豚汁 豚肉，みそ，白菜，長ネギ，ジャガイモ，糸コン タクアン	コーヒー，みかん，おつまみ，カップヌードル かんジュース
3/30	ご飯，みそ汁 トーフ，みそ，長ネギ，にぼし，ワカメ， 魚のかん詰 タクアン	残りもの		コーヒー，みかん，おつまみ かんジュース

降するのは，下界のスキー場では味わえない最高の気分。何回も来ているスカウトは一気に飛ばすが，初めてのスカウトは私と一緒に滑べる。途中，直径40㌢ぐらいの樹木に正面衝突したり，樹木の周囲に風のために溶けてできた大きな穴に落ちたりするアクシデントもあったが，幸いケガ人は出なかった。

午前11時30分，30分余の大滑走を無事終えて野営地に到着。テントキーパーの副長たちが沸かしてくれた熱いコーヒーで一服。慣れないスカウトはひざがガクガクして，みんな大笑い。

午後の課業は雪洞作り。10人ほど入れる雪洞を2時間ほどで完成させた。

＜3月29日　薄曇り＞　午前中は，ロープ結びと救急法の勉強。救急法では，特にスノーボートの取り扱い方法と患者搬送の実技を学んだ。

斜面を横断するときは，スピードとバランスがとれなくて転覆することもあるが，何回も練習すると〝コツ〟を覚え，結構上手に扱えるようになる。午後は，斜面にジャンプ台を作り，ソリのジャンプ大会とボブスレー競技大会に興じた。

＜3月30日，曇＞　天気予報によると，低気圧が接近中で，山は午後から荒れ模様ということで撤収を早めた。朝食後，優秀スカウトT君の表彰を行った。T君にはUSAスカウト章入りのネッカリングを，準優秀スカウトのH君には，木彫りのネッカリングが授与された。

隊装備と一部の個人装備を小屋に保管（雪が消える5月中頃に回収）し，午前10時30分，スキーで下山。テント類，ゴミ，残菜等はスノーボートで下げた。下山中，頭部が赤くなった日本カモシカに出会う。

午前11時，トラックに装備を積んで下山。打合せ時間より早かったため，迎えの車が来ておらずスカウトたちを町まで歩かせた。午後2時，人員装備に異常なく解散。

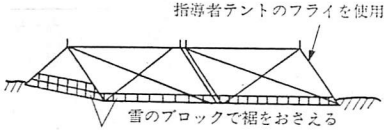
§ 雪中野営の設営方法

1．**居住テント**（冬山用ウインパーを使用）　まず，テント設営面を踏み固めて水平（中央部を少し高く）にし，塩をまいて雪を凍らせる。その上に防水のため，ビニールシートを敷き，テント（グランドシート縫着）を立てる。テント内には，断熱材のマット（プラフィルトとエアキャップシート）を敷き，その上にグランドシートを敷いて内張を付ける。

ペグは角材（1寸角45㌢）を横にして雪に埋め込みながら塩をまく。（角材には張綱を張り直しできるように中央部の角をけずって丸くしておく）

このような方法で，雪面からの断熱処理を完全にし，湿気，冷気を断つことが雪中野営を快適に過ごす第一条件である。そして，暖房用にはラジュースをたく。気密性の高いテントのため，内部の上は30℃以上にもなり，時々換気をしなければならない。濡れたものもすぐ乾き，内ではシャツ1枚で過ごせる。テント内の照明は発電機から配線し，電球（60W）を配置する

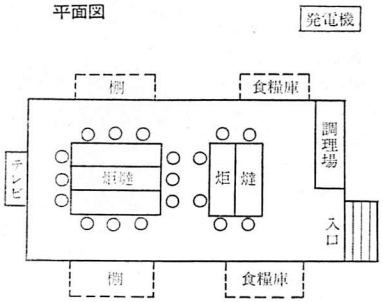
2．**集会テント**　テント予定地を地面が出るまで掘り出す。その上にフライを2連にして覆う。フライのすそは雪のブロックを積み上げて押える。



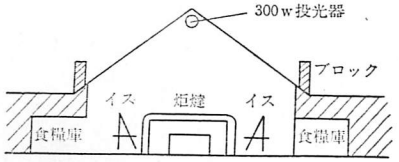
テント内には，会議用のテーブルを並べ，その上に毛布を掛け，テーブルクロスがわりにグランドシートで覆う。テーブルの下には1斗かんを半分に切った空きかんに炭火をおこして入れる。いわゆる純日本式のこたつである。多少外気が冷えこんでも，腰部から下が暖かければ快適にすごせる。ここは全員の居間であり，食堂兼勉強部屋でもある。

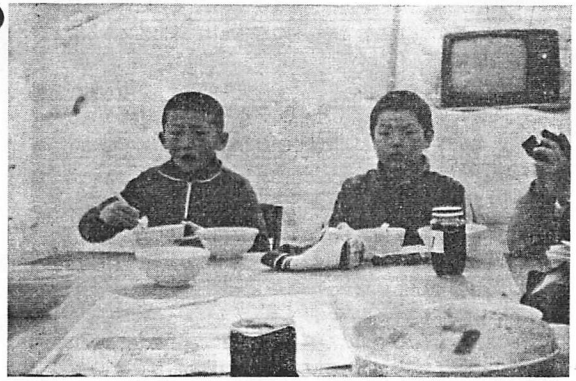
テント内の雪の壁を掘って食糧庫などの棚を作り，荷物を整理する。照明は，300W の投光器をセットする。

平面図



断面図





§ 地図の見方

特別に変わったことはなくごく一般的な見方を指導しているにすぎないので，ここでは省略する。

ただ，当団では入山前に必ず座標と磁北線を入れた地図を各人に配布し，自分の行動するコースに朱線等を入れて確認させ，周囲の地形などを事前に予備知識として頭に入れさせておく。

そして，行動中は地図はケ

ース（透明）に入れて磁石と共にリュックの取り出しやすいところに入れ，絶えず周囲の地形と照合させて，自分の現在位置を知るように指導している。

§ 雪を生かして使う方法

無雪期と比べて，その利点をあげてみよう。

(A)無雪期では，やぶなどのように道がない所は行動できないが，雪があれば，全山が雪の舗装道路となり，自由に登山コースがとれる。

(B)スキーを利用することができる。これは下降の際に行動が容易となり，かつ短時間に最短距離で目的地まで行動できる。

(C)ビバークの際には，雪洞やイグルーを利用できる。これは外気が−10℃以下でも，その内部は0℃以上であり，保温効果があり，風に強い。

ただし，雪洞は換気が悪く，湿気が多いことが欠点である。

(D)テント設営地は，雪上のためにどこにでもできる。ただし，雪崩れのないところに設営する。

(E)生鮮食糧は雪の中に入れることにより，長期間保管が可能である。

§ 反省・評価

昭和44年春から毎年実施して思うことは，十分な装備，支援体制，安全対策，そして経験豊かな指導者の指導があれば，ボーイ隊（見習いスカウト）も雪中野営に参加できると確信している。

この結果，全季を通じて幅広いスカウティングが楽しめるようになった。また，事前に装備資材をデポすることにより，実施当日の運搬量が大幅に軽減され，行動も楽になったことは，この野営の成功の原因である。

装備については，冬山用の器具，器材を使用しているが，これは「七戸山岳会」からの助言と装備を借用（特にテント等）しているため，雪の山岳地帯でも可能である。夏山の装備で雪中野営を行うことはボーイ隊には無理ではなかろうか。やはり，雪の山岳地帯ではそれ相当の準備があって可能であり，安易な気持ちでの雪中野営は慎しむべきである。

雪中野営に初めて参加する見習いスカウトは〝お客さん〟と呼ばれる。野営生活はすべて中学生のスカウトが面倒をみてくれるが，ただ一つの仕事を与えられる。それは〝水くみ〟である。100㍍ぐらい離れた沢からポリタンクで水を運び，水がいかに貴重なものかを体験させる。

野営を終えて帰ったスカウトの両親からは毎回のごとく「たくましくなって帰ってきた」と感謝の言葉を聞くたびに，雪中野営の意義があったことを感じている。

（青森第6団ボーイ隊隊長）

夏用備品を改造し実施

渡辺　誠

私たち船橋15団と16団のシニアー隊は，昭和52年から3年間続けて毎年3月末に長野県野沢温泉村で合同雪中キャンプを実施している。

この雪中キャンプの特徴は，夏用の備品でも使えるものはできるだけ使用し，止むを得ないものだけ冬山用品を使用しているところにある。これは，冬山装備が高価で，かつ使用する期間が限られているところから，ほとんどの隊が持ち合わせていないためである。

そこでまず，夏用テントで雪中キャンプを行うためのデータを取ってみた。その結果，夏用テントと冬用テントの相違点は，保温性にあることがわかった。

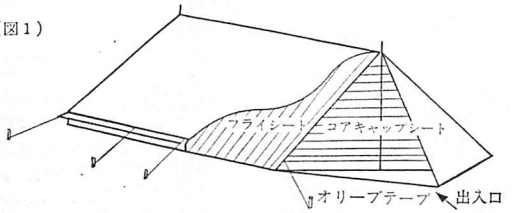
具体的には，①内張りがある　②出入口が密閉できる　③換気口が密閉できる　④グランドシートが本体に縫いつけられている…等々のことである。そこで，夏用テントを改造することを考えた

改造に当たっては，①いつでも元に戻せること②強度を損なわないことに留意した。

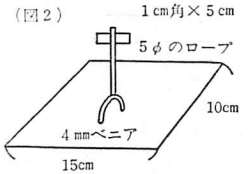
§ テントの改造について

1．**内張**　内張は，フライシート両端にこん包用のエアキャップシート（菓子などのカンに入っているツブツブの空気層のあるビニールシート）をオリーブテープで接着した。

（図1）



（図2）



テント本体を立てた後，この内張をポール最上部に，フライシート両端のひもで固定し，下部はフライシートの張綱をピンで固定した。このとき，上部はリッジポールの下に張った方が温かいようである。（図1）

エアキャップシートは，1巻き42㍍で4～5千円程度で買え，運搬が容易であるので使用した。

2．**床面の断熱**　まず，グランドシートを敷き，その上にエアキャップシートを重ねた。寝るときは，さらに発泡ウレタン製のロールマット半身分を敷いた。

ただ歩くときに足の裏全体に体重をかけないと，エアキャップシートがつぶれるので注意しなければならない。

3．**出入口**　出入口を密閉できないので，前室を作り，寒気が直接テントに入らないように工夫した。

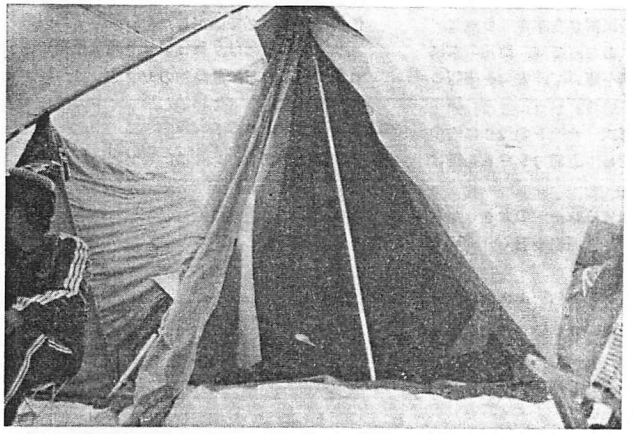
前室は，テントの三角コーナー側を出入口にすれば，コーナー部分が前室になるので，入るときはテント本体のチャックを閉め，次に上から垂らしたエアキャップシートをめくり，テント内に入ることにした。

4．**換気口**　夏用テントの上部換気口網の部分にビニールシートをオリーブテープで接着してふさいだ。

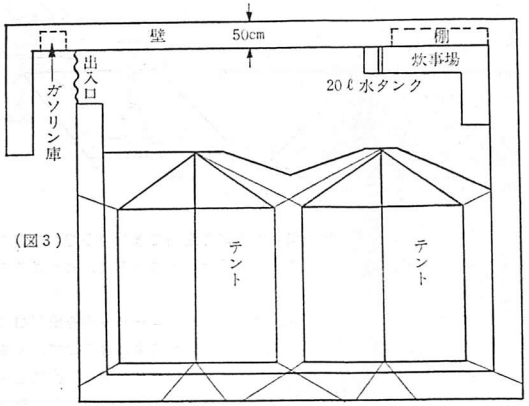
これで6人が寝たが問題はなかった。この場合テント内で，ランタンなどを使わない方がよいと思った。

5．**ペグ**　ペグは，板ペグを使用している。付属のペグは雪中では固定力が減少して使用できないので，ベニヤ板で10㌢×15㌢×4㌢に作り，中心部に穴を2つあけ，5㍍×10㌢のナイロンロープを縛り端に1㌢×1㌢×5㌢の角材を縛った。

板ペグは撤収時を考えて赤く塗りロープも赤を使用した。ただベニヤ板のため，水気に弱く，撤収時には大分はがれてしまったので，今後は



使用した改造夏用テント。白く見えているのがエアキャップシート



（図３）

耐水ベニアを使う必要がある。（図２）

§ キャンプサイトについて

1．**立地条件**　キャンプサイトは，民宿から 100 ㍍ぐらいの所にあって，上部は畑で，その上に25度ぐらいの斜面に林があり，段々畑の上から２段目を使用した。横には小川が流れていた。

初年度（52年３月）は，小川が見えていたので水場を確保できたが，53年は雪が多く，川と思われる場所を２㍍以上掘り下げたが，川を掘り当てられず，近くの民宿から水をもらった。

サイト地を決めるにあたっては，地元の人に雪崩などの危険の有無を聞いて，安全を確認してサイト地を決定している。

2．**キャンプサイトの形式**　サイトの周りに雪のブロックを積んで壁とし，上部にシートを掛けて天井とした。（図３）

3．**設営手順**　(1)上に掛けるシートの大きさからサイトの大きさを決め，外周線を引く

(2)外周線内側を踏み固める

(3)外周線から壁の厚さ分を引いて内周線を引く

(4)内周線内側から30㌢角のブロックを切り出し内周線外側に積む

(5)テントの位置を決め，残りの作業スペースの床を30㌢掘り下げる

(6)調理台，棚を壁に作る

(7)出入口を作る

(8)テントを張る

(9)天井上ポールを組み立てる

(10)天井用シートを掛ける

(11)テント内にマットを敷く

(12)装備品を入れて，整理する

以上，所要時間は約４時間を要した。ブロックの切り出し方法は，角スコップを四方にさし込み，下にスコップを入れて切り出し，ブロックは天地逆に積み，上面を平らにして次第に積み上げた。

ブロックの壁は，厚さ30㌢ぐらいしかなく弱いので，外側に雪をはりつけて厚さを50㌢以上にし，壁の高さは約１㍍にした。内側はブロックを切り出すので，テント場床面から約１㍍50㌢になっている。作業場床面からは，約１㍍80㌢になるので立って作業ができる。

天井を支えるポールは，水道用塩化ビニールパイプを１㍍に切って，アルミパイプでジョイントして使用した。塩ビパイプはしなうので，天井はカマボコ型にし，天井用シートは，５㍍40㌢×３㍍60㌢の工事用ビニールシート２枚を使用し，板ペグで固定した。

サイトの壁には，スコップで棚を作り，物入れに使用したが，危険物のガソリンは，サイトの外側に棚を作って格納し，サイト内には１ℓジグタンクのみを入れた。

肉類は，18ℓカンを横にして壁に埋め込み，前面にふたをして使用した。

出入口は，上部に塩ビパイプを渡し，シートを下げて戸にした。

水穴は浅く掘ったが，水は雪に吸い込まれるので支障はなかった。

便所は，サイトの外に雪を土まで掘り下げて地面に穴を掘って作った。

（長所）(1)風が入らないので温かい　(2)雨のときでもぬれない　(3)荷物用テントが必要ない

（短所）(1)設営時間を要する　(2)手間がかかる

(3)降雪時に雪下ろしが必要である　(4)日中，日光が入らない　(5)炊事のとき，天井をめくらないと湯気がこもる

以上，このサイトは，人手と時間は要するし壁も補強しなければならないが，風が強くなったとき，夜の気温が低下したときなどは，昼とは逆に中は温かく，過ごしやすいと思われた。

52年，53年ともにキャンプ中に雨が降ったが天井のありがたさを感じた。54年は16団がこのサイトを作り，15団は別の方法を試みた。この方法等については，次の機会に紹介したいと考えている。

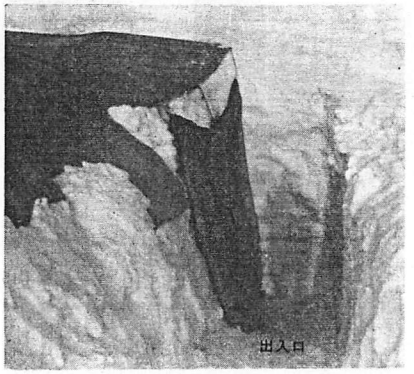
§ 食事について

1．**カロリー**　52年度の計画で 3,000 cal としたが，不足だったので，53年は 3,400 cal としたが，帰宅後体重が１～２㌔減っていた。54年は 3,800 cal にしたところ，終了後の体重は１～２㌔増えていた。このことから今後は，3,600 cal にしようと考えている。

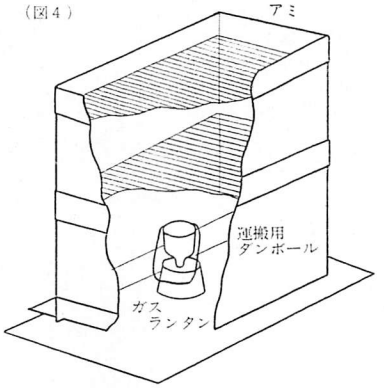
2．**食事回数と配分**　食事は朝食，昼食，間食，夕食，夜食（ワッチ食）になっている。（ワッチ＝当直）

カロリーは，朝食，昼食が約1,000cal，夕食1,200cal，間食250cal，夜食350cal ぐらいの割合いに分けている。

3．**炊事用コンロ**　当初はＢＳ隊の緊急用コンロ



（図４）



（ホエブスNo624）を使用したが，53年からはコールマン製ピークワンを使用している。このコンロは，双方ともホワイトガソリンを使用するが，ピークワンは2,250Kcal の熱量があり，プレヒートなしで点火できることから便利に使用している。

石油ラジウスでも良いと思うが，ブタンコンロは雪中で無理があると思われる。

§ 備品について

備品は，夏とほとんど同じ物を持って行った。特に変わった物としては，魔法びんと板ペッグぐらいである。

備品の総重量は，111.5㌔になり，11㌔強を分担した。

小物は，ダンボール箱の底に３㍉厚さのベニヤ板を敷いて補強して運んだ。このベニヤ板は，ガソリンストーブの下に敷いたり，コッフェルを置くなどして使用した。

§ 衣服について

1．**上着**　厚手のセーターの上に，ウインドヤッケを着用した。ワッチのときなどは，セーターを２枚重ねて着た。

タートルネックのセーターは，ワッチときのようなあまり動かないときはよいが，作業時に

は暑くなるので，前開きのセーターの方がよいと思われた。

2．**ズボン**　ウール製品を着用するよう隊員に指示したが，手持ちがない者もあって，ウールのズボン，スキーズボン着用者が半々だった。

このほか，Gパンを着用してきた者がいたがすそが凍ってかなり寒かったと言っていた。このことから綿製以外ならよいと考える。

3．**下着**　冬山のセオリーどおり，下着はウール製にと指示したが，ほとんどの隊員が持っていないので綿製の下着を着用していた。

そこで，背中にタオルを入れ，汗をかいたら取り替えるようにさせた。ズボン下はウールのタイツを着用している者が多かった。

冬山用の下着を着用していた者は，やはり快適のようだった。

4．**手袋**　ほとんどの隊員は，スキー用革手袋を使っていたが，革手袋はぬれると保温性がかなり低下するので，やはり毛糸の手袋にオーバー手袋が最良と考える。

手袋のスペアーは，最底2組あるといいと思われた。なお，ぬらさなければ軍手もかなり温かい。

5．**靴下**　全員毛糸の靴下を着用していた。足が冷えると話をしておいたので，全員がスペアーを3組以上持っていた。

なお，手袋をぬらした隊員の中には，靴下を手袋がわりに使用している者もあった。

6．**靴**　ゴム長靴の中にフェルトの敷き皮を敷き上部から雪が入らないようにスパッツをした。スパッツは，54年に初めて使用したが，靴に雪が入る今までの悩みが解消された。

7．**寝袋**　需品部で販売している夏用シュラフを二重にして使用している。隊員の中には，スリーシーズン用を二重にして使用した者もあったが，暑かったようだ。

§ 衣類の乾燥について

当初特別に乾燥法を考えないでキャンプを行いその反省をもとに53年から乾燥が大きな問題となり，いろいろな方法を試みたが，まだ思ったように乾燥できなかった。

今回行った方法は，運搬に使ったダンボール箱の底をあけて，2つを重ね，上のダンボール箱の中にヒモで棚を作り，下のダンボール箱の中でガスランタンをたいて乾燥させたが，火力が弱いためあまり効果的でなかったので，今後はガソリンストーブを使用して乾燥させることを考えてみたい。（図4）

以上が当団で実施した雪中キャンプのあらましである。

サイト全景

終わりになったがお世話になった野沢温泉村民宿の鈴森さんをはじめ，野沢温泉スキー場の方々にこの誌面をお借りして心からお礼を申し上げたい。なお，詳細についてのお問い合わせは〒274千葉県船橋市緑台2－5－1－516 船橋第15団ＳＳ隊長　渡辺誠までご一報ください。

第2回雪中キャンプの記録

石垣　正彰

〝キャンプとは夏季だけのものにあらず，
　スカウトに冬ごもりはない。

の合言葉で行った第1回目の雪中キャンプ。あれから3年，それもそろそろ記憶の薄れてきたこのごろである。いつのころからか，何とはなしにシニアースカウトを中心に「雪中キャンプをやろう」という声が出てきた。一昨年の10月さっそく団の運営機関である団委員会の承認を得，第1回目の雪中キャンプ資料を参考に本格的なキャンプの準備にかかった。

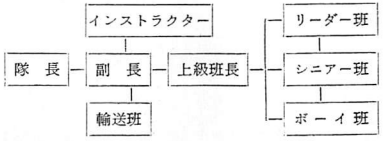
＜準　備＞

1回目の下見を12月9日に石垣，百井両副長が行う。えぼし，三住，七日原，白石スキー場と見て歩いたが，総合的な面から考えて白石スキー場に決める。雪は全然なく京成ロッジにも人はいなかった。設営予定地にスキーのストックを立てて帰る。

それからはリーダー会議，スカウトの集会，リーダーの実験キャンプ，学校，父兄への連絡，各関係機関への連絡と承諾等，これらの資料をまとめて再度，団委員会の承認を得た。

その結果次のような準備体制ができた。

1）人員構成（参加者20名）



※　今回は特にカブスカウト隊のリーダーからも応援をしてもらい，シニアー，ボーイ，カブと3隊のリーダーが，一丸となっての行事に発展する

2）献　立

2月10日　昼食――　各自持参
　　夕食――｛米飯，豚汁，漬物
　　｛野菜サラダ
2月11日　朝食――雑炊，漬物，梅干
　　昼食――力そば

3）持　物

隊装備

○国旗　○マーキー　○ランプ　○救急箱
○A形テント　○ガスコンロ　○カメラ
○カーペット　○石油ストーブ　○ラジオ
○ビニールシート　○木炭　○温度計
○コンパス　○練炭　○ポリタンク　○石油
○炊具一式（大鍋他）　○ロープ　○角材
○工具一式（かけや他）

個人装備

夏季キャンプと同じであるが寝具関係には気を配った。

○毛布2枚　○豆炭あんか　○エアーマット
○寝袋　○スキー　他

4）主な活動

○雪中におけるテントの設営
○防寒に対しての工夫
○献立，炊事の工夫
○スキー技術の向上
　以上の4点に訓練の目標をおく。

5）参加資格

○リーダーおよび団役員
○シニアースカウト
○ボーイスカウト（中学2年生のみ）

6）安　全

○傷害保険への加入

7）交　通

○備品，装備はトラックにて運搬。
○参加者はリーダーの車に分乗して行く。

8）費　用

○特別隊費
　500円

場所：宮城県白石市　白石スキー場
とき：昭和55年2月10日(日)～11日(月)
　　1泊2日

＜以下　実践記録より＞

2月9日（土）

午後からトラックへの荷揚げを始める。15:00，スカウト達が個人の荷物を持って集まってくる。16:30，隊装備の積込み完了，簡単な打合せを行い解散。

輸送班の石垣副長は，シニアースカウト2名（宮本隆行，菊地正好）を伴い，17:30，竹駒神社出発。隊装備は翌日のできるだけ早い時間に現地に到着させたいと考え，村田町在住の副長宅にお世話になり一泊する。

2月10日（日）

まだ夜の明けきらない，05:30，輸送班は村田町を出発する。06:50，白石スキー場へ到着，朝日がまぶしい。岩沼，白石付近に薄くもやがかかり，同行したシニアー2名はすっかり感激している。もうすぐ満杯になるであろう駐車場には，まだ5台の車だけ……。ラジオを聞きながら冷たくなったおにぎりを食べる。07:15，輸送班の3名は本隊が到着するまでに，できる限り作業を進めるべく行動を開始する。積雪は意外に多く170㎝位はある。実験キャンプ時の80㎝とは大違いである。雪を踏み固めて道をつけ，マーキーを立てる場所の

81. 1. SC

除雪に2時間も要する。

本隊は神社参拝の後，07:30,出発した。日曜日のためスキー客が多く，遠刈田方面に向かう車は全てスキーを積んだものばかりだ。えぼしスキー場入口付近は，すでに車の渋滞が始まっている。白石スキー場も入口からストップ状態，予定よりも1時間以上も遅れてキャンプサイトに着く。キャンプサイトでは輸送班がマーキーを立て終り，炊事場作りに入っている。

全員そろったところで開会のセレモニー。国旗掲揚を行い，隊長より作業の諸注意を受ける。10:00,リーダー，シニアー，ボーイ，食堂の4班に分かれて作業を開始する。テントを張り終えて昼食。この頃から風が強くなり，テントの裾に雪を載せる作業を行う。午後の課業はスキーを予定していたが，サイト補修のためできない。17:30,夕食，献立は豚汁と野菜サラダ。今年の冬は野菜が高く，1個400円もしたレタスはとくにおいしい。

風は依然強いが，補強したテントはビクともしない。しかしちょっとしたすき間からも雪が入り，これも大変である。マーキーの暖房は，円筒形のストーブと一斗缶を用いた炭火を利用する。練炭も置いたが，暖房の役にはたたない。

19:00から班活動，シニアースカウトを中心にスキー技術の向上についてのミーティングを行う。リーダーは明日の打合せと今日の反省会を行ったが，話題はつきない。外の天候とは反対に，テント内はなごやかな雰囲気につつまれる。22:00,明日の良い天候を祈念しながら寝袋に入る。

2月11日（月）

06:00,目覚し時計のベルで起床。風なし。太平洋から上がる太陽は一段と大きく明るく見える。朝食前の足慣らしのため，宍戸副長の引率によりゲレンデに向かう。雪質は固まった上に粉雪という最高の状態である。

朝食は雑炊と漬物。唐がらしを入れ過ぎて辛くて辛くて，それでもみんなよく食べる。

08:00,朝礼。建国記念日の空に日の丸が揚がる。今日一日の安全を祈念しながら竹駒神社を拝する。スキー指導担当の百井副長より事故防止について話がある。08:30より全員でスキーを行う。リフトを使えないスカウト（中にはリーダーも？）もいたが，どうにか滑れるようになる。

11:00,食事当番は昼食の準備に入る。献立は力そば。昨夜の寒さで餅が凍ってしまい，焼くのに苦労する。13:00撤収開始，14:30撤収終了。雪降る中で国旗降納。お世話になった白石スキー場へ全員で感謝の弥栄をおくり，15:00予定通り出発する。

16:30竹駒神社に無事到着。神前に進み雪中キャンプの完了を報告した後，解散する。夏季キャンプと違って，大きなリックサックと毛布を包んだ風呂敷，それにスキーと，いかにも雪中キャンプだったんだなあ，という感をリーダー一同新たにする。

なお今回，特にご支援，ご指導をいただいた白石営林署，白石スキー場京成ロッジ，河北新報の北川記者，県庁広報課の三浦さんの皆様に心から御礼を申し上げたい。

＜反省，評価＞

今回で2回目の雪中キャンプであったが，まだまだ経験の浅いわが団には反省することが多々あった。

1）プログラムについて

○朝礼時にハットの着用は最低限必要である。スキー服を着てしまうので，スカウトらしい姿が見えなくなる。

○今回はスキーが主な活動になったが，他にも何か考えたい。

2）マーキーの使用について

○除雪によって地面を出したのは良かったが，暖房のため土がやわらかになり足場が悪かった。

○石油ストーブの暖房は効果的であった。

3）防寒について

○夏季用テント（フライ付）に予備綱を用いて補強すれば，厳冬でも使用できる。（ただしテントの布地に注意が必要）

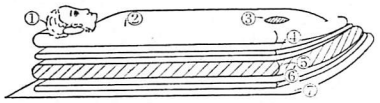
○次回のキャンプは，冬用のテントを用いたい。

○就寝

テントの中に雪さえ吹き込まなければ，寒さは感じない。（最低気温は－8℃であった。）

就寝の防寒対策

就寝の防寒対策



①フード付き帽子
②寝袋（中に毛布1枚）
③豆炭あんか
④毛布1枚
⑤エアーマット
⑥カーペット
⑦グランドシート

4）食料について

○生野菜他，凍る食料品には注意が必要である餅を凍らせてしまい焼くのに苦労した。

○献立は簡素であったが，この程度で良いと思う。

（カロリーよりも腹一杯おいしく食べれば十分である。）

実施までの日程

S54.11.24(土)○合同リーダー会議
（キャンプ計画を決める）
12. 9(月)○キャンプ地下見
15(土)○団委員会
（キャンプ実施の承諾を得る）
24(月)○シニアー打合せ
（具体的計画について話合い）
S55. 1. 8(火)○白石営林署に入山許可申請申込
○京成ロッジ連絡
12(土)○シニアー・ボーイ打合せ
19(土)○団委員会
（具体的計画の説明）
20～21○リーダー実験キャンプ
(日)(月)（3名）
2. 2(土)○リーダー・スカウト最終打合せ
2.10～11○雪中キャンプ実施
(日)(月)

（宮城連盟宮城第202団シニアー隊副長）

宮城・仙台地区

冬の楽しさ、教えてあげる ウインターキャンプ イン 宮城

ボーイスカウトといえばキャンプ、キャンプといえば夏、と思い込んでいませんか？

宮城連盟・仙台地区。ここには、新しい年を雪山で、手作りのイグルー（雪のブロックで作る半球状の家）の中で迎えようと、冬が来るのを楽しみにしている指導者とシニアースカウト、レンジャースカウト（ガールスカウト）たちがいます。

仙台地区雪中キャンプは、去る年末年始で第十回を終えた、息の長いプログラムです。全員で作るイグルーのほかにも、自然観察、スキーなどといった個人プログラムもあり、夏とは違った感動を味わえるのが、スカウトの心を引き付けて離しません。

✦冬は、もう夏から始まっている

仙台地区雪中キャンプは、年末年始の五日間、宮城県、鳴子町にあるオニコウベスキー場で行っています。キャンプ地だけでなく、リフトなどの施設までも㈱鬼首高原開発の協力を得られる、という恵まれた環境です。

このキャンプでは、イグルーを作って暮らすのが特徴。一般スキー客も興味津々で見学に来ます。しかし、さらに自分の体より大きな荷物を持っての移動キャンプも大きなプログラム。それだけに、事前の準備も真剣です。

キャンプの準備は、真夏から始まります。特別委員会の開催、スタッフ募集、スカウトと父母への説明会を経て、約二か月後の十月、第一回目の隊集会が開かれます。

初めての隊集会で班編成を行い、班長・次長、各係が決まります。このメンバーで極寒の雪山生活への準備、プランを考えていくのです。

隊集会、班集会を重ね、綿密なプログラムを作ってゆく。

楽しい夕食の時間。ホカホカの食事は、極寒キャンプをのりきる大事な要素だ。

下山して弥栄三唱。
また今度も来たい、と思いながら。

✦夏のキャンプとは少し違う

日常ではあまり体験することのない雪山では、健康や安全に注意することがとても大切です。雪中キャンプでの個人装備は、ロングスパッツ、オーバーミトン、登山靴が必需品です。スパッツは、登山靴の隙間から雪が入り込むのを防ぎ、オーバーミトンは手袋の保護、登山靴は濡れない、蒸れない、足首の保護をする、と雪中生活を考えればなくてはならないものです。

また、キャンプ中の食事のメニュー、班・個人プログラムなども、スカウトたちが向かう雪山のようにまだ白いまま。班集会を重ねて考えていかなくてはなりません。食事のメニューは、おいしくて体が暖まり、無駄のないよう合理的に、と楽しいけれど大変な作業です。スープを温めた水で食器を洗うなど限られた環境での工夫も忘れてはなりません。雪を良く知る指導者たちが、彼らの作る計画書を厳しくチェックします。

その他にも、彼らが過ごすイグルーの作り方、ガスストーブや和かんじき（移動キャンプで、これを履いて新雪の中を歩く）など、慣れないことに不安になりながらも、準備万端で、心待ちにしていた雪中キャンプへと突入します。

豪華ダイニングキッチンつき イグルーで暮らす

ひんやりとした白い息と、今にも押し迫ってきそうな白い壁、そして、耳をすましても何も聞こえない白い異次元の世界。そんな、異次元の世界をイグルーに寝て不思議な体験をしてみませんか。何よりも雪の中って、思っていたよりも暖かいことにびっくりするはずです。

Ⅰ 作る前

・場所と積雪を考える。場所はできるだけ傾斜地を避けて平地を選ぶ。積雪は踏み固めて圧雪することを考えると、最低でも1メートルは欲しい。

・用具は、角スコップとスノーソー(雪を切るのこぎり)を用意する。角スコップは、雪のブロックの切り出し、スノーソーは、ブロックを切り出し形を整えるなど、この2つはイグルー作りになくてはならないもの。

・役割を決める。全員が踏み固め係。その他にブロックの切り出し係、運搬係、積上げ係。切り出し係は、スノーソーでブロックの切り出しを、運搬係は、切り出したブロックをイグルーを作る場所へと運ぶ。積上げ係はブロックを積上げ、イグルーの作成を行う。

Ⅱ 雪を固める

イグルー作りの最初のステップ、雪踏み。みんなで固まって、少しずつふみ固めてゆく。

ふわふわだったパウダースノーも、体重の結集でぺったんこに…。

・イグルー作りはまず、全員で雪を踏み固めることから始まる。2時間から3時間、時間をかけてひたすら、踏む、踏む、踏む。この作業を十分にしておかないと、ブロックを切り出したとき、途中で割れたり、崩れたりするため、単調で根気のいるとても大切な作業の1つだ。

Ⅲ 大きさを決める

・イグルーは、5人用で底辺の直径が3〜3.5メートルくらいの大きさが必要。キャンプサイトのレイアウトを考えながら、踏み固めた雪の上にイグルーを作る場所を決め、円を書く。

少し小さいと感じるかもしれないが、小さい方が、安全性、快適性が高い。

Ⅳ ブロックを切る

・踏み固めた雪をスノーソーで、だいたい縦40センチ×横60センチ×高さ40センチの直方体を40こくらい切り出していく。

・ブロックは、スノーソーで地面に四角に切り目を入れ、角スコップをうまく利用し、てこの要領で慎重に地面から運び出す。

・ブロックを均一の大きさに切り出していくことが、イグルー作りの成功につながる大きなポイントだ。

スノーソーで雪を切る。

スノーソーで四辺を切ったら、スコップでブロックをとり出す。

理想のブロック。なるべく同じ大きさのブロックを使おう。

Ⅴ 積み上げる

・雪の上に書いた円に沿って、ブロックを互い違いにレンガ積みの要領で積み上げていく。

・積み上げ係は、イグルーの内側に立ち、円を作るように並べていく。

・直方体に切ったブロックを並べながら、上に乗せるブロックが少し内側に傾くように上部をスライスする。こうしないと、ドーム状にならない。

・上の段になるに従い、ブロックを少しずつ小さく、ドームを作るようにする。

・天がいは、開いている穴より大きいブロックを切り取って乗せる。ブロックはとても重いので、2〜3人で慎重に積み上げていく。

・最後に、風下に出入口を作る。

・出来上がったイグルーの形を整えながら、接合部の透き間に雪を詰めて完成である。

イグルーの1段め。ブロックの形を整えながら重ねていく。

5人用でこのサイズ。あまり大きくすると、やはり冷える。肩よせあって暖かく眠ろう。

この頃、だんだん出られなくなる積み重ね係は、少し不安になってくる!?

2段め、3段めとつみ重ねてゆく。

Ⅵ イグルーに寝る

出入口からイグルーの中をのぞいてみると…。

イグルーの中から外を見る。ブロックの透き間の雪のうすい部分からもれる光がとても美しい。

・完成したイグルーは、多少の力で崩れることはない。その中で一夜を過ごした場合は、体温でブロックの接合面が1度溶け、再び凍るので強度が増してくる。しかし、外気温と内気温そして雪質によって、天井が数センチも沈下することがある。

・イグルー内部は、冷たい風が入らず、大雪でも大風でも零度くらいにしか下がらないので、思ったよりも暖かい。しかし、湿度が高く、90〜100パーセントにもなるので、防水のきいたシュラフカバーなどがいる。

Ⅶ ダイニングキッチンを作る

班員のくつろぎの場。うまく竹をわたしてフライをかぶせればできあがり。

食事の準備中。ストーブを置く部分だけ雪を切りくずさない、など工夫もいっぱいある。

仙台地区特製イグルーには、ダイニングキッチンがついている。

・あらかじめ設計図を作り、出入口、調理台、イグルーへの出入口の場所を決めておく。

・イグルーと同様、内部からブロックを切り出すが、調理台にする部分は最後まで切り出さずに、テーブル状に高くしておく。

・竹を利用してフライをかぶせれば出来上がり。

・食堂を作らない時は、グランドシートや、ブロックでアーチを作ったり、冷たい風が入ってこないような工夫をする。

Ⅷ イグルーをこわす

・凍ったイグルーは簡単には壊れないので、壊すときもスノーソーと角スコップを使用する。

・スノーソーで、やや下の方のブロックを内側に落としていく。いくつか落とすと上部が崩れ落ちるので、角スコップで地面を平らに整えていく。

・もちろん、作りっぱなしは危険。

これがきょうからの僕たちの家、イグルーだ。しかし、まだ出入口がなく、中には積み重ね係のスカウトが残されている。

中からスノーソーで切り出して出入口を作る。
"外の世界はまぶしいなあ"

それぞれの声

オニコウベスキー場の人の話

最初は、山頂に泊まると聞いてびっくりしましたが、山頂に建物もあるし、装備もしっかりしているので少し安心しました。今では雪中キャンプが来ないと年が越せないほどです。

高校生のころ来てた子が、リーダーになっている姿がたくましいですね。

仙台地区指導者の話

以前、スカウトの保護者は「風邪をひくのでは」と心配していたが、参加してきたスカウトの自信、指導力や計画性など、成長をたくさん見ているから今ではそんな心配はなくなりました。若いときに冒険をして、自然のおそろしさを知るのは良いことです。それに、リーダーを育てるのはシニアースカウトから始まっているのではないでしょうか。ここでシニアーらしい活動をしないとアドバイスできませんから。

参加スカウトの話

自然の厳しさの中の優しさがいい。学校の行き帰りに雪が降って「やだなあ」と思っても、ここに来たら雪がなきゃイグルーも食堂も作れない。いやなものでも、少し視点を変えると「いいもんだ」と思えるから、後輩にも絶対すすめたい。